

[市民公開講演]

特別講演Ⅲ

全国へ広がった佐賀の種痘

青木 歳幸

佐賀大学地域学歴史文化研究センター

天然痘の感染力、致命率の高さは、古代からよく知られており、その予防法もさまざまに工夫されてきた。『医宗金鑑』(乾隆7(1742)刊)には、衣苗種法、漿苗種法のほか、水苗種法、旱苗種法の人痘法が紹介されていた。

久留米藩医家を嗣いだ緒方春朔は、長崎で吉雄耕牛に師事し、『医宗金鑑』の種痘術を知り、秋月藩医となり、寛政元年(1789)に初めて接種、以後、寛政8年までに1,100人以上に接種し成功したという。しかし、人痘法は危険が高く、一般的には普及しなかった。

1796年にジェンナーの発明した牛痘法は、19世紀前半には中国に伝播していた。広東の英商館医ピアソンが1805年に実施した種痘は、同僚の英人スタアントンが漢訳し『新訂種痘奇法詳悉』で紹介、尾張の伊藤圭介が天保12年(1841)『英吉利国種痘奇書』として刊した。マニラからマカオへ伝えられた牛痘法を受けた邱浩川が『引痘略』を出版。それを紀伊の小山肆成が『引痘新法全書』(序文天保13年, 1842)を、佐賀では藩医牧春堂が同名の『引痘新法全書』(弘化3年, 1846)として刊行し、牛痘法を紹介した。牛痘法への期待が高まっていた。

佐賀藩では、蘭方医伊東玄朴を天保14年(1843)御側医に、玄朴門人大石良英を弘化元年(1844)に召し抱え、弘化4年(1847)には中天遊門人大庭雪斎が御側医となり、西洋医学の導入が活発化した。

江戸前期に、佐賀藩と関係の深い長崎通詞で外科医に楢林鎮山(1648~1711)がいた。

鎮山は、フランスの外科医の蘭訳本を参考に『紅夷外科宗伝』を著し、紅毛流外科を弘めた。楢林家は通詞のほか、鎮山、栄久、栄哲豊矩、栄哲高茂、栄哲高連、宗建へと医家が続き、佐野孺仙ら佐賀藩外科医を育てた。

栄哲高連の子が楢林宗建で、文政10年(1827)佐賀藩医となり、弘化4年(1847)正月8日に藩御側役へ牛痘取寄方何書を提出し、許可された。

翌嘉永元年(1848)新任蘭館医モーニックが来日時に痘漿を持参したが、不善感だったため、痘痂を入手依頼した。嘉永2年(1849)6月、バタビアからスタート・ドルトレヒト号が入港し、痘痂が到来した。宗建は、3男建三郎、オランダ通詞加福喜十郎子喜一(喜市)、志筑清太郎子3人を出島に連れていき、モーニックから接種を受けた。建三郎のみ善感し、その痘漿を宗建が残り2人に接種し、善感した。急ぎ、佐賀藩から大石良英が長崎へ派遣され、善感したことを藩主に報告した。藩主の命により、8月6日、宗建と種痘児が佐賀城下へ到着し、島田南嶺子、牧春堂子、大石良英子に接種し、善感したことにより、藩主子淳一郎に接種した。

嘉永2年11月、鍋島侯が江戸に出るにあたり、藩医島田南嶺が痘苗を江戸へもたらした。伊東玄朴が、大石良英、佐野寿仙、水町某(昌庵カ)、牧春堂が立ち会うなかで、藩主長女貢姫11歳へ、両腕に2箇所ずつ2行12箇所接種し、善感した。伊東玄朴のもとでの痘苗は、桑田立斎、大槻俊斎らに分苗され、やがて、安政5年(1858)の神田お玉が池種痘所へと発展した。

立斎は、アイヌへの種痘などを行い、種痘10万人の悲願を抱いて種痘を続けた。立斎門人館林藩医長澤理玄は種痘術を学び、疱瘡長屋で8,941人(『日本教育資料』)に接種したという。

モーニックは長崎市中での種痘を行い、長崎通詞から痘苗を得た京都の日野鼎哉から、福井の笠原良策、大坂の緒方洪庵へと広がった。我が国最初の種痘が佐賀藩医により成功し、全国へ広がった。それがちょうど160年前のできごとであった。

以上が、我が国へ牛痘が導入された主な経緯であるが、本講演では、なぜ、佐賀藩が諸藩に先駆けて牛痘を導入できたのか、また佐賀藩領内での種痘はどのように行われたのか、種痘の普及は民衆意識や医学の「近代化」にどのような影響をあたえたのか、などについても触れることにする。